



半分に割ったらじょうのうが裂けた
(赤松富仁撮影、以下も)

おいしいミカンはむきにくい
標高250m。自家の裏山の段々畑に平田守さんのミカン園はある。30度近い急傾斜を登つたり下つたりと、足腰が相当鍛えられそうな畠だ。11月初旬に訪問すると、4haの園地にM・S玉中心のミカンがたわわに実っていた。平田さんが「させぼ温州」をもいで渡してくれた。「糖度は12度くらいあるんじゃなかですか」。収穫は11月20日頃で、まだ半月ほど先だ。

さつそく、果実のお尻からペロンと皮をむこうとするも、あれれ、うまくむけない。細かくちぎれて進まない。そこで、真っ二つにパカッと割ると、割れ口のじょうのうが裂けた。「おいしいミカンは果皮もじょうのうも薄い。むきにくいのが難点ですね」食べると、まだ少し酸味が強めだが、甘みとコクがしつかりのつている。デジタル糖度計で測ると、13.7度。平田さんの予想を上回っていた。

えぐるように切ると、カルス形成が早まる
これだけ糖度の高いミカンをたわわにならせているってことは、樹にかな

長崎県長与町・平田守さん

隔年結果せず、コクのあるミカンが房なりに立ち枝を残す切り上げせん定



平田守さん(52歳)。右は息子の大輝さん(23歳)で、2019年に就農。別経営で2haのミカン園を借りている。

縦の枝を生かす カンキツのせん定



先端から地下部へ、根っこから地上部へ。

縦の枝を生かして、

植物ホルモンの流れをつくる。

隔年結果させずに、うまい果実を安定多収!

切り上げせん定でつくる平田守さんのミカン。
その実にもそばには必ず発育枝が伸びている
(赤松富仁撮影)

縦の枝を生かす カンキツのせん定

「大丈夫ですよ。果実の上に、ちゃんと芽（発育枝）が出てるでしょ」たしかに、房なりのミカンの上には、翌年の結果母枝となる発育枝が伸びている。これが、切り上げせん定した枝の特徴なのだそうだ。

切り上げせん定とは、横枝を切つて立ち枝を残す切り方。一般的な切り下げせん定とはまったく逆だ。樹冠下から覗いて見ると、たしかに横枝が切られてカルスが巻いた跡があり、立ち枝が縦方向に伸びている。

「こうやって、えぐるように切るんです」枝の切り口（傷口）はできるだけ小さくするのが常識だが、えぐるよう大きな切り口をつけるほうがいいという（右図）。

切り口が大きいと枝への刺激が強いため、立ち枝の葉から植物ホルモンの

オーキシンとサイトカイニンは10対1の比率のときに細胞分裂が最高になるとといわれ（『植物ホルモンを生かす』太田保夫）、オーキシン濃度がさらに高くなると根が分化し、サイトカイニン濃度が高まると芽が分化する。ジベレリンはチッソのようなイメージで、栄養生長を促進する。

樹形は考えない、下がった枝を切るだけ

りのストレスがかかっているはず。隔年結果せずに、来年もちゃんと実るのだろうか？

「大丈夫ですよ。果実の上に、ちゃんと

芽（発育枝）が出てるでしょ」

たしかに、房なりのミカンの上に

は、翌年の結果母枝となる発育枝が伸

びている。これが、切り上げせん定し

た枝の特徴なのだそうだ。

切り上げせん定とは、横枝を切つて

立ち枝を残す切り方。一般的な切り下

げせん定とはまったく逆だ。樹冠下か

ら覗いて見ると、たしかに横枝が切ら

れてカルスが巻いた跡があり、立ち枝

が縦方向に伸びている。

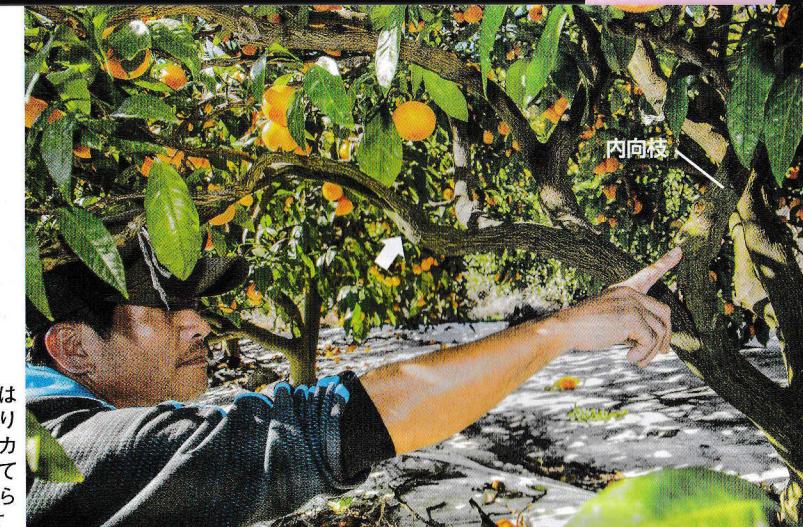
「こうやって、えぐるように切るん

です」枝の切り口（傷口）はできるだ

け小さくするのが常識だが、えぐるよ

うに大きな切り口をつけるほうがいい

という（右図）。

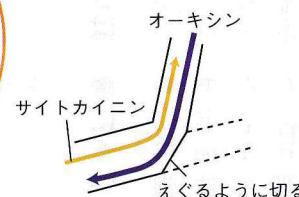


指先と矢印部分などは
6年前に骨格枝を切り
上げせん定した跡。カル
スがしっかりと巻いて
いる。内向枝でも切ら
ずに縦の流れを生かす

切り上げせん定

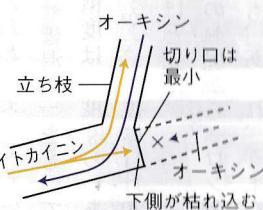
カルス形成の早いやり方

オーキシンもサイトカイニンも切り口に届く。切り口の刺激が大きくホルモン量も多い



ふつうのやり方

切り口にオーキシンが十分届かず、カルス形成が遅れる



切り口は大きいが、ホルモンの流れがよいのでカルスが早く巻く



以前切った横枝の
切り口（ふつうの
やり方）

時期はすぐれたが、実
際に切ってもらった



平田さんのミカン園。かつては成木園で10aチップ12kg入れて約3tの収量だったが、切り上げせん定でチップ量を5kgに減らしたところ、収量は5tにアップ（段々畠の幅は3~4m、樹間は1.5~2m）

繩の枝を生かすカンキツのせん定

増え「枝に蓄積され、同じ結果田枝に花芽も発育枝も出るようになる。樹勢も保たれているから有葉花が多く、直花が少ない。着果率も高くなる。

「とにかく、下がっているところを切っていくだけ。樹形とかは一切考えません。主枝、亜主枝はどうとか、内向枝は切るとか、考えない。下がったところを切ると、毎年花ができる、芽（発育枝）が出る。芽が出るってことは、根も出てる。で、着果すると、ミカンの重みで枝が下がってきて、内側にも光が当たる。来年枝が下がつたままなら、元気な立ち枝（発育枝）の手前まで切り戻す。その繰り返しです」

果実の重みで上から下へ、せん定で下から上へ。枝をぐるぐる回すように更新していくのだ。

なお、切り過ぎると反発が強まるので、落とす葉は全体の2割以内に抑えられる。また、若木では栄養生長に傾き過ぎるので成木園でやるよう注意する。

増え「枝に蓄積され、同じ結果田枝に花芽も発育枝も出るようになる。樹勢も保たれているから有葉花が多く、直花が少ない。着果率も高くなる。

「とにかく、下がっているところを切っていくだけ。樹形とかは一切考えません。主枝、亜主枝はどうとか、内向枝は切るとか、考えない。下がったところを切ると、毎年花ができる、芽（発育枝）が出る。芽が出るってことは、根も出てる。で、着果すると、ミカンの重みで枝が下がってきて、内側にも光が当たる。来年枝が下がつたままなら、元気な立ち枝（発育枝）の手前まで切り戻す。その繰り返しです」

果実の重みで上から下へ、せん定で下から上へ。枝をぐるぐる回すように更新していくのだ。

「社会を回すにはそういうのも必要かもしれないけど、樹がもともともつてるとんボテンシャルを生かしたほうがいい」と平田さん。

パワー旺盛な立ち枝を残す切り上げせん定なら、減肥が可能だ。平田さんもこれを始める7年ほど前までは早品種で10a~12kg程度のチツソを入れていたが、現在は4月に5kgのみ（有機配合）。土に施す肥料は、梅雨明け前の栄養生长期が終わる頃にチツソが切れる程度とし、必要な時期に葉面散布

すると、弱い横枝に直花がたくさんつくが、実がとまつても着果負担で樹がさらに弱ってしまう。肥料で樹勢回復をねらうが、多肥は病害虫の引き金となり、農薬散布が増える悪循環に陥りかねない。

「社会を回すにはそういうのも必要かもしれないけど、樹がもともともつてるとんボテンシャルを生かしたほうがいい」と平田さん。

後半の8~11月は実や花芽を充実させるべく発酵リン酸液肥の「コーソゴールド」（500倍）を毎月1回。そのほか、年間を通してカルシウム資材9回、収穫前にクラッキングや浮き皮防止のための尿素1000倍液など、こまめに散布していく。

表層根を生かし、味をのせる

もう一つ、ミカンの味のせとして平田さんが重視しているのが、表層根



切り上げせん定で、実がとまって垂れ（昔の枝（原口早生）。2021年は、指先の位置で切ってAの発育枝にならせ、2022年はBの位置で切ってCの枝を生かす。Dの枝も太くなるので23年は状況に応じてEの位置で切り上げる）

緑の枝を生かすカンキツのせん定

着果ストレスで生殖生長に
とはいっても、この表層根を維持するの
は簡単でない。

一般には乾燥ストレスを与えて、糖
度を上げようと、早生品種なら7月下旬
旬にタイベックマルチを張る。タイベ
ックは水蒸気を通すので、土が湿つた
状態ならいつ張つてもよいが、やがて
土壤表面が乾燥して表層根は消える。
一方、平田さんは水蒸気を通さない
白黒マルチで土壤水分を保持し、表層

細い上根は本数が多いだけに、根冠
(根の先端) の数も多くなる。必然的に
根冠でつくられる総合的なホルモン
の量も増す。栄養生長を促すジベレリン
だけでなく、生長を抑制するアブシ
ジン酸や、果実の成熟を促すエチレン
も、生育に応じてバランスよく分泌さ
れるようになるのだ。

細分が果実へしっかり送られるよう
になる。

だ。マルチをはがして指先でちょこち
よこっと土をどかすと、ふわっとした
生きた上根が顔を出した。

地下深くへと伸びる太根主体ではな
く、表層に細根をビッシリ張らせるこ
とで、樹は暑れずコンパクトになり、



白黒マルチの下の土を指先で少しどけると、細い上根が現わ
れた

切り上げせん定あり
6月に花のつき具合を見
ながら、下垂した枝をち
ょこちょこと切り上げ
せん定した樹。暴れやす
い「させぼ温州」がこん
なに実った(栄養生長し
やすい品種は花を確認し
てからせん定する)



切り上げせん定なし
5月に下垂した枝を切り
上げしなかった樹。なり
っぷりが明らかに違う
(骨格枝の切り上げは3
年前に済)

が降つてほしい」という。

「着果量が多い分、日照りの年は玉が
小さくなるデメリットもありますよ。
ただ、最近は小玉果が喜ばれるし、毎
年のように異常気象でドカ雨が降るこ
とを考えると、結局は切り上げせん定
で減肥しながら、葉面散布で刺激した
ほうが、確実に味がのるんですよね」
2020年は、全国的な傾向として
糖度が10度台止まりのミカンが大半と
なっている(10月下旬現在)。梅雨の
長雨・曇天と8月の猛暑・熱帯夜の影
響で、チツソが効いてジベレリン活性
が高まり、生殖生長への切り替えがで
きない樹が続出しているからだ。

切り下げせん定と乾燥ストレスで、

樹を弱らせて糖度を上げる慣行の多肥
栽培は、そろそろ限界にきているので

はないだろうか?